

味覚障害・味覚異常 の最新情報

—— 特集にあたって ——

日本口腔・咽頭科学会が2019年に行った調査では、味覚障害患者は、60歳以上の高齢者に多く、男女比は2:3と報告されている。本邦での推定患者数は10万人当たり年間220人で、同様の調査を行った1990年と比較して、約30年間で2倍に増加していた。味覚障害の対応へのニーズは高まっているにもかかわらず、味覚障害診療体制は十分整っているとは言い難い。味覚障害が直接生命予後に影響することはまれであるが、食事の楽しみが失われることは生活の質を著しく低下させるため、その疾患への対応は重要である。

味覚障害と亜鉛との関連は広く知られるようになった一方、亜鉛補充療法に反応しない味覚障害も存在する。「食事がまずい」と感じるのは、味覚機能の低下(甘いや塩辛いがわからない)のみならず、他の感覚との統合や情動の関与といったより高次の味覚認知機能の歪みが原因の場合がある。また、食事への意欲の低下がフレイルやうつにつながることもある。

本特集により味覚障害の多面性を理解していただき、食事のおいしさを取り戻す取り組みに役立てていただければと考える。

東京都立広尾病院 耳鼻咽喉科
田中真琴